

香坂忍は、桜の花に対して「トコナマのよつな変な」こだわりを持っていた。

このため四十歳を過ぎた頃から毎年春になって誰もが桜見物で浮かれているというのに、彼は落ち込んだ気分になり花見というものに一度も行ったことはなかった。

それが古希を迎えた今年二〇〇七年の三月の下旬にひょんなことから妻の美佐子と実
に久しぶりに花見に行くことになった。

なぜ香坂が桜の花に対してマイナスのイメージを持っているのか？

これは一口で言えば香坂が過ごしてきた三十数年間の職業生活と深いかわりがある。

彼は東京の私立の大学を卒業すると公務員試験の上級職試験に受かって労務省に採用された。いわゆる世に言う「労務省のキャリアー」になったのである。

そして六十歳近くで役所を退官するまで何回も地方の県庁や労務省の出先機関に転勤させられた。

その人事異動の時期はいつも決まって四月の桜の咲く頃であった。

せっかく新しく出会った人々と親しくなっていてこれから長く付き合っていこうと思っていたときにいつも別れの儀式が香坂を待っていた。

別れの相手はその時々によって入れ変わった。

役所の職員であったり、近所の人達であったり、スナックの女性達であったり、ごくたまには特定の女性であったりいろいろであったが、桜の季節になるといつも香坂はグットバイといわなければならなかった。

だから桜の咲く季節は、香坂は好きにはなれなかった。

そして香坂は大勢の人の前で転勤での別れの挨拶をするときにはいつも決まって『さよならだけが人生さ』という有名な某作家の棄て台詞を引用した。

こんなことが何度も重なって香坂は、いつしか桜に対してこだわりを持つようになり花見には行かないようになつたのである。

その香坂が三月の彼岸の入りに妻の美佐子と会社勤めの二人の娘と青山墓地に墓参り

に来ていた。

ここには美佐子の母が眠っていた。香坂一家は春と秋のお彼岸には必ずここに墓参りに行った。

墓参りを終わって墓地の管理事務所の前まで来ると美佐子が立ち止まって事務所の掲示板を見ていた。

風の強い日で、香坂より五歳年下の美佐子は、白髪交じりの髪を片手で押さえながら熱心に掲示してあるポスターを見ていた。

「お父さん、この桜の花綺麗ね。普通の桜じゃあなくてこんなシダレザクラは見たことないわ。私是非見たいわ」

香坂も美佐子の声を耳にすると、「二歩掲示板まで戻って美佐子が指差すポスターを見た。

そこには、六義園の花見のポスターが張っており、一枚の見事なシダレザクラの写真が写っていた。

「ああ、六義園の有名なシダレザクラだね。前に誰かに聞いたことがあるよ」

「六義園ってどこにあるのかしら?」

「確か駒込だと思っただけ。ああ、ここに書いてあるよ。地下鉄の南北線の駒込駅で下車して徒歩で七分だとさ」

「駒込なら確か昔洋子さんが一番最初に小料理屋のお店を出していたところじゃあなかったかしら?」

洋子というのは香坂の二番目の妹であった。

「そうだよ。お母さんも昔のことをよく覚えてるね」

美佐子は、香坂にあまり褒められたこともないのに褒められてまんざらでもない顔をした。

「六義園ってどんな庭園なの?」

「私もうる覚えだからうちに帰ったらパソコンで正確に調べてみるよ」

香坂達四人は、いつも鼻肩にしている花屋さんから借りていった桶や箒などの墓参の道具を返すと、昼も過ぎていたので途中イタリア料理のレストランに入ってそれぞれが好みのスパゲッティを注文し、最後にコーヒーを飲んで青山二丁目の駅から電車に乗って帰宅した。

翌朝、偶然にも朝のNHKのニュースが六義園のシダレザクラが今が見ごろだというニュースを流していた。

香坂はニュースを見て前日の青山墓地でのことを思い出して、あわててパソコンのインターネットを開いて六義園について調べた。

そして一番よく説明してあるサイトをプリントした。

最近、香坂は、妻の美佐子と一緒に外を出歩いたことはほとんどなかった。

若い頃はよく美佐子連れ出しては名所旧跡を見せたり、旨いものを食べたりして過ごしたものだ。香坂が六十歳を過ぎた頃からは一人で出歩くことはめっきり少なくなった。年をとってめんどくさくなったこともあるし、経済的な余裕がなくなったことも外出しなくなった理由であった。

そんなことでたまには妻を外に連れ出すことも必要だと考えていたところちょうどタイミングよく六義園のシダレザクラの話が出て、香坂は美佐子が見たいというなら六義園の桜を是非見せてやりたいと思っていた。

この頃では香坂もこれからの二人の余生もそんなに長くないだし、妻が見たいものがあれば何でも見せてやるつもりでいた。

美佐子のほつも普段は自分のほつからこれが見たいとか、あれが食べたいとかの欲望を積極的に言い出すような女ではなかった。今回言い出したことは、本当に珍しいことであった。

時計が八時を回ると美佐子がおきてきた。

「お母さん、おはよう。あなたが二、三日前に青山で言っていた六義園のシダレザクラ、今朝のNHKのニュースで今がちょうど見ごろだといっていただけ、明日でも子供達も誘って見に行こうか。平日だけどちようど子供達も会社が休みのようだし」

「本当に連れて行ってくれるの。あなた、珍しいわね」

美佐子は皮肉っぽい言い方をしたが、久しぶりの香坂の誘いを聞いて喜んだ。

「それからね。この間尋ねられた六義園のことパソコンのサイトからコピーしておいたよ」
香坂は、A四の紙にコピーしたものを美佐子に渡した。美佐子は、すぐに手元にあった老眼鏡をかけて資料を読み始めた。

「この庭園すごいですね。五大將軍の徳川綱吉の信任が厚かった川越藩主の柳沢吉保が築園したと書いてるわね。そして明治になってあの三菱の岩崎彌太郎の別邸になって昭和

十三年に東京都に寄付されたようね。今は国の特別名勝になっているんだって。特別名勝といえば、確か前に連れて行ってもらった四国の高松の栗林公園と同じだね。私六義園に行って見たいわ」

「私も見たことがないから早速行こうか」

香坂は桜にはいささか抵抗があったが、シダレザクラなら普通の桜とは別ものだよというよゆうな気がして二人の間にすぐに意見が一致した。そのあとで娘達も賛同して桜を見に四人で六義園に出かけることになった。

翌日香坂一家の四人は、自宅のある世田谷の駒澤大学驛から田園都市線に乗って永田町で南北線に乗り換えて駒込に向かった。

電車は、平日の金曜日だというのに大変混雑していた。

特に卒業シーズンであるのか学生の姿が多く、和服に袴姿の女子学生や羽織袴の男子学生が飯田橋の駅や東大前の駅から何人か乗ってきた。

駒込の駅には、洋子の店があった二十年近く前には今のJR、山手線で行ったことは何度かあったが、地下鉄で行くのは今日がはじめてである。

驛を降り地上に出ると広い通りに出た。歩道は、その割には狭く何か京の町でも歩いているようであった。

「あなた、洋子さんのお店はどの辺にあったのかしら？二、三回来たんでしょ」

美佐子が辺りをぐるっと一回り回転してみながら香坂に聞いた。

「確かに私も二、三度洋子の店に呑みに来たけど、何しろ二十年も前のことだから、店がどこにあったかもうすっかり忘れてしまったなあ。覚えているのは確か国電の驛のそばじゃあなかったかということだけだよ」

本当のところ全く香坂には記憶が残っていなかった。

娘達は、道路沿いにある藍染やアクセサリーの店や塩大福の和菓子屋などを覗きながら歩いていった。

まっすぐの道を五分も歩き右側に曲がると、すぐに六義園の中央の入り口に出た。

長女が入場券を四人分かって公園の中に入った。六十五歳を超えている香坂夫妻の入場料は半額であった。

入り口入ってほんの少しだけ歩いたところに、沢山の人だかりがしていた。そこには例の大きなシダレザクラがあり、今正に八分咲きであった。

柳のように垂れ下がったピンクの花びらは実に見事であった。

見学者は年配の夫婦ずれが多かったが、それぞれが写真を撮ったり、ベンチに座って眺めたり、シダレザクラの美しさにほとんどの人がため息をついでいるようであった。

桜に見入っていた香坂は、花が好きだった洋子もこの駒込に住んでいた頃は、この季節にはここに来てきつとこの桜を見たんだろうなあと洋子のことを考えていた。

このシダレザクラを見て洋子はどのように感じたろうか？香坂は湿っぽく感傷的になった。

「洋子叔母ちゃんもこの辺りでこのシダレザクラの花を見ていたんでしょね？」

長女も香坂の心の中を見透かしたように美佐子と香坂のほうに向かってそんなことをしんみりといった。

次女の方はデジタルカメラで盛んに桜の花を夢中になって写していた。

「そつだね。今あそこのベンチに洋子と同じぐらいの年のおばあさんが座って一人で桜を見ているじゃない。当時の洋子もあんな感じじゃなかったのかなあ……」

香坂が言つと美佐子がすぐに手を左右に振りながら大きな声を出して異論を挟んだ。

「あなた何を耄碌してるの。洋子さんが今も生きていればあのおばあさんぐらいでしょうけど、洋子さんがここに住んでいたのは四十台の頃でしょうよ。その頃は洋子さんはあんなおばあちゃんじゃないわよ。それに洋子さんはその頃はあんな寂しそうな表情はしてなかったわよ」

「そつだね。私の完全な錯覚だよ。洋子もその頃はあのおばあさんよりずっと若かったはずだよ」

あえて美佐子に異論を唱えて口にはしなかったが、駒込時代の洋子はかなり暗い表情をしていたように香坂は記憶していた。

「洋子は何で駒込というところで店を始めたんだろうかなあ？」

香坂が自分に言い聞かすように首をかしげながらぼつりと呟いた。

「あなた。洋子さんから聞いていないの？多分知り合いでもいたんじゃないの」

香坂の独り言のような問いを耳にした美佐子が反応してきた。

「私は聞いてないよ。知り合いなどいなかったと思うけど……」

思いもよらない美佐子の反応に驚いた香坂が口ごもった。

家族の間の会話はしばらく途絶えた。

四人は、シダレザクラを觀賞すると、その場所を離れ散歩のコースになっている大名庭園の池の周りをゆっくりと回った。

途中、コブシの大きな木がところどころにあり見事な白い花を一杯つけてこちらのほうも今正に見ころであった。

「やー、シダレザクラもよかったけど、このこぶしの花もきれいだね。きっとカサブランカの好きな洋子もそれにちよっと似たところのあるこの花も好きだったろうなあ。彼女もこんな角度から見たのかな？」

また、香坂の口から洋子のことが出た。

香坂は、身体をしながらこぶしの花の咲いた上空を見上げていた。

茶屋のあるところで香坂達は『三福ダンゴ』を買って食べ、池の側のベンチに四人揃って腰をかけた。

ちよつど今から七、八年も前かな？洋子の悲しい出来事が始まったのは 香坂は『回遊式築山泉水』の庭園の見事な遠景を眺めながらぼんやりと考えていた。

その物語は、数年で幕を下ろしてしまっただけど、あまりにも香坂に強烈なインパクトを与えたので、今でも香坂は忘れていなかった。いや忘れていないどころかその出来事は香坂にとっては今も重い十字架となっていた。

香坂には洋子を含めて妹が三人いるけど、他の二人の妹の印象は薄く、この出来事の中に出てくる洋子の存在感は香坂にとっては格別であった。

香坂は、この悲しい出来事を忘れようとして？いや忘れまいとして？誰にも内緒でいま紙に書きとめていた。

紙に書いて全部自分が思っていることを吐き出せば忘れられるような気もするし、紙に書いて思いを遺せば永遠に忘れられないような気がするからである。

香坂は、どちらのほうを望んでいるのか、今の段階では正直のところ分からないが、これは自然に任せるのが一番いいかなとも香坂は考えていた。

春一番のような強い風が吹いて波立った池の水面に香坂が見たこともないような大きな白い鯉が飛び跳ねた。

「そつだ。あれは間違いなく七年前だ。この世のすべての出来事の始まりがそつであるように、あの出来事がある日突然始まったのも・・・」

香坂にはあのとときの出来事の始まりのきっかけとなった電話のベルの音が聞こえてくるよつであつた。

香坂は首を振って静かに目を閉じた。

2

一年の内には何日かは時間やすべてのものが止まったような気分がある夜があるが、七年前の二月下旬のその晩……